

おっぱいだより

36号

今年は雪が遅いと思っていたら、大雪になりました。それとともにインフルエンザが流行してきています。手洗い・うがい、人ごみを避けるなど、予防をしっかりといきましょう。また、インフルエンザに関しては、おっぱいだより34号で薬剤師さんからお話を伺っていますので、合わせてご覧ください。

さて、今月は新生児内科の佐藤尚医師にRSウイルス感染症についてお話をうかがいました。

RSウイルスについて



新生児内科医師

佐藤尚

RSウイルスって知っていますか？いわゆる「風邪」症状を起こすウイルスで、その辺に普通に存在しているものです。そこで鼻をかんでいるあなたも、これが原因かもしれません。

大人の場合は鼻かぜ程度で終わってしまうのですが、赤ちゃんの場合は鼻水、咳、熱などの症状が比較的強く出ることが多く、特に初めて感染した赤ちゃんの30-40%は肺炎や細気管支炎など、重症化するとされています。そこまで至らなくても、多量の鼻水で呼吸がしづらくなったり、哺乳が困難になったりすることがあります。3-6か月くらいのより小さな赤ちゃんでは、突然に呼吸を止める「無呼吸」がみられることもあります。非常に稀ですが、脳炎や脳症を発症し、けいれんや意識障害を起こすこともあります。比較的程度の強い症状がある場合には入院治療が必要になります。また、急性期の症状が治まった後も、喘息のようなゼーゼーが出やすくなる場合があります。



RSウイルスは、毎年冬に流行します。1歳までに約半数、2歳までにはほぼ100%の赤ちゃんが感染するといわれています。終生免疫ではありませんので、毎年のように感染することもあります。感染を重ねるごとに症状の程度は軽くなることが多いとされています。

感染経路は飛沫感染、接触感染と考えられています。つまり、感染した人の咳のしぶきや鼻水などがつくことによって感染します。また、衣服などに付着したウイルスは最長で 7 時間程度感染力があります。ということは、兄弟が幼稚園などからウイルスを持ち帰り、それが赤ちゃんに感染するといったことも起こりうるので、注意が必要です。



特効薬はなく、症状を和らげる治療が中心となります。感染を予防するワクチン也没有せん。感染を予防することが大切になります。特に赤ちゃんは、冬はむやみに人ごみの中に連れ出さない、風邪症状のある人を近づけないようにし、家族は外出後の手洗い、うがいなどを心がけましょう。しかし、どんなに注意していてもどうしてもかかってしまうことがあるのです。特に早い時期の赤ちゃんに上記のような症状が見られた場合、早めに医療機関を受診するようにしましょう。

まずは予防が大切で、症状があるときは早めの対応が大切ですね。特に赤ちゃんは症状が重くなりやすいようなので注意が必要そうです。

「母乳育児は 40 年後の社会を変える」

さて、先日上記のテーマで院内勉強会を行い、院長はじめ多くの職員のご参加をいただきありがとうございました。

永山医師からは「なぜ母乳育児が大切か～母乳育児がもたらすもの～」として、母乳育児を推進する理由や、オキシトシン、健やか親子 21 についてお話がありました。オキシトシンは最近注目のホルモンですが、さまざまな働きを持つことが分かってきており、成長に関わるほか、不安軽減、母性行動や他者との相互作用などのコミュニケーションにも関わっているそうです。

木屋助産師からは「母乳育児成功のための 10 カ条をわかりやすく解説する」として、新潟市民病院の現状も織り交ぜながら、10 カ条の項目一つ一つについてお話がありました。



この内容は 1 月 26 日、新潟市赤ちゃんにやさしい育児推進協議会において、地域の保健師、開業クリニックのスタッフに向けてもお話されました。

40 年後の社会が住みよい社会になっていると良いですね。その住みよい社会をつくる一端を母乳育児が担うと考えると夢が広がります。